

植民地期－建国期アメリカにおける「常識」の思想
——フランクリンを中心に——

片山 文雄

Roles of “Common Sense” Ideal in Benjamin Franklin’s
Social and Political Thought

—A Perspective of “Common Sense” Ideal
in Colonial and Revolutionary America—

Fumio KATAYAMA

Abstract

This paper investigates roles of “common sense” ideal in social and political thought in the U.S.A. in the colonial and revolutionary era. It focuses on Benjamin Franklin, one of the founding fathers of the U.S.A.

For Franklin, “common sense” has three main aspects. First, common sense relates to ordinary peoples’ sense of judgement, mostly based on not human reason but human feelings and emotions. Franklin sought to communicate the breadth of this concept in his communication with his colleagues.

Secondly, common sense works as the condition and foundation on which Franklin tried to establish and promote collective social actions. He had visions of the ideal society, in which people do good to others, by engaging in their own daily business (vocations), and by cooperating to make their social life comfortable, for example organizing fire defense unions, establishing academies and hospitals, and so on. In both ways, Franklin construed “doing good to others” not as giving special privileges to families and friends, but as serving the whole society. He wanted to pursue the public good. For this goal, he perceived peoples’ “common sense” as good tools of communication.

Thirdly, Franklin thought that only the people that have “common sense” can carry political power on their shoulders. When he aimed to establish the militia in the Pennsylvania colony, he called only to “the middling people” to participate in the militia and to take up arms. According to his radical and potentially revolutionary ideal, only daily working and socially serving “middling people” should deserve political power. This ideal constituted one of the main currents of political thought in the American revolution era.

内村鑑三君より来状あり。曰く、フランクリンは常識（コンモンセンス）の使徒なりと。

国木田独歩『欺かざるの記』¹

¹ 亀井俊介「フランクリンの人と作品」、『ベンジャミン・フランクリン』池田孝一訳、研究社、アメリカ古典文庫1、1975年所収、26頁より引用。

一 はじめに

1 本稿は、植民地時代から建国期にかけてのアメリカの人物ベンジャミン・フランクリン Benjamin Franklin の社会思想、政治思想を主な対象として、それが独特な意味で「常識 common sense」を重視していること、そしてその思想の特質を示そうとするものである。

2 まず本稿の接近方法を示しておきたい。

建国期アメリカ政治思想研究の大家ゴードン・ウッドが示したように、フランクリンはイギリス人意識を強く抱いていた²。読書家・蔵書家として³、ベーコン、ミルトンやロック、シャフツベリ伯、コリンズ、ポープ、デフォー、アディソンとスティールなどの著述家たちの著作に親しみ、数回のロンドン滞在中にはマンデヴィルらとも交流したことは『自伝⁴』などによって知られる。またケイムズ卿をはじめとしてヒューム、スミスらスコットランドの著述家たちとも交流があったことは、田中秀夫の大著『アメリカ啓蒙の群像⁵』とくに第一部で詳細に

² Gordon S. Wood, *The Americanization of Benjamin Franklin* (New York: The Penguin Press, 2004), 邦訳『フランクリン、アメリカ人になる』池田年穂・金井光太郎・肥後本芳男訳、慶應義塾大学出版会、2010年。

³ 死後残された蔵書は4276冊、言語は英仏伊羅西独に及ぶ。A. Houston, *Benjamin Franklin and the Politics of Improvement* (New Haven: Yale University Press, 2008), p. 5. 蔵書はフランクリンの死後散逸してしまったが、復元が試みられた。Edwin Wolf, Kevin J. Hayes, *The Library of Benjamin Franklin* (Philadelphia: American Philosophical Society, 2006). またフランクリンが印刷業者として出版した本のリストもつくられている。C. William Miller, *Benjamin Franklin's Philadelphia Printing, 1728-1766: a descriptive bibliography* (Philadelphia: American Philosophical Society, 1974).

⁴ Franklin, "The Autobiography," in J. A. Leo Lemay ed., *Benjamin Franklin, Writings* (The Library of America, 1987), pp. 1305-1469. 邦訳『フランクリン自伝』松本慎一・西川正身訳、岩波文庫、1957年。

⁵ 田中秀夫『アメリカ啓蒙の群像 スコットランド啓蒙の影の下で 1723-1801』名古屋大学出版会、2012

跡付けられたとおりでである。ここから、フランクリンの思想をイングランド啓蒙、スコットランド啓蒙の著作群と比較対照し、その影響関係からフランクリンを理解することも可能だろう。

しかし今回はその接近方法ではなく、フランクリン自身のテキストを、彼の社会・政治活動の実態と関連させて読むことで、彼の「常識」の思想の特質を整理することに重点を置きたい。この方針を採る最大の理由は筆者の力量の問題であるが、フランクリンの思想の特質にも関係している。

2 フランクリンの多彩な生涯を紹介しておこう。

フランクリンは1706年、マサチューセッツ湾植民地ボストンで蠟燭業者の子(17人兄弟の15番目!)として生まれた。両親は敬虔なピューリタンであり、牧師になるためラテン語学校に通わされたが経済的事情ですぐ止めている。実兄の経営する印刷屋に年季奉公人として勤めたが、兄の暴君ぶりに耐えかね、またピューリタニズムを批判する理神論に染まったこともあり、17歳のとき兄との契約を破ってボストンから逃亡、ペンシルヴェニア植民地フィラデルフィアに移り住み、以後その地を主な活躍の舞台とした⁶。

われわれにとってフランクリンは、有名な『自伝』のおかげで、またマックス・ヴェーバーの「資本主義の精神」論の影響で、勤勉と儉約とによって裸一貫から成功した経済人ないし

年。

⁶ フランクリンの伝記として、古典的な Carl Van Doren, *Benjamin Franklin* (1938; New York: Penguin Books, 1991)のほか、最も詳細な J. A. Leo Lemay, *The Life of Benjamin Franklin vol. 1-3* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2005-9) がある。後者は著者の死去により途絶したことが惜まれる。

成功者のモデルとして知られているだろう⁷。彼の本業は印刷業・新聞発行業であり、「貧しいリチャードの暦 *Poor Richard*」や新聞「ペンシルヴェイニア・ガゼット」、パンフレット「富にいたる道 *The Way to Wealth*」などをヒットさせた。彼は人々が欲する情報を、人々が好むスタイルで素早く提供する、才覚に富んだ経営者であった。

ビジネスの合間には科学や発明に熱中した。当時ではフランクリンは何よりもアマチュア科学者として有名だった。雷が電気であることの証明や避雷針の発明に止まらず、遠近両用眼鏡、オープン・ストーヴ、楽器アーモニカなどを発明する才にも恵まれていた。

それだけではない。フランクリンはまた、当時の植民地社会・アメリカ社会における、さまざまな社会活動・政治活動に従事し重要な役割を果たしている。まずはフィラデルフィアを舞台に、仲間の職業人たちや政府関係者と協力しながら、様々な社会改良事業に取り組んだ（火災保険組合、道路舗装組合、大学、病院の設立など多彩である。晩年には奴隷解放運動に尽力している）。40代で印刷業を引退したのちは政治家となり、フィラデルフィア市議会の書記そして議員（1748年）、ペンシルヴェイニア植民地議会議員（1751年）を務めた。50代には州議会代表としてロンドンに渡り、10年以上もペンシルヴェイニア領主と交渉を続けた。独立革命期にはペンシルヴェイニア憲法制定会議議長に推され（1776年）、晩年にはペンシルヴェイニア州知事になった（1785年）。

アメリカ独立革命においては、第2回大陸会議の代議員（1775年）、独立宣言起草委員

⁷ 経済的成功者としてのフランクリン像は数々あるが、フランクリンから若き日のドナルド・トランプまでの成功の意味の変遷を描いたピーター・バイダ『豊かさの伝説 アメリカン・ビジネスにおける価値観の変遷』野中邦子訳、ダイヤモンド社、1992年（原著1990）などを参照。

（1776年）などを務めた。さらに植民地大使としてイギリス本国との交渉に携わり、独立戦争が本格化してからは渡仏してフランス政府と交渉し、援助を獲得して独立戦争を勝利へと導くという重大な役割を果たした。独立戦争を終結させたパリ和平条約（1783年）にも署名している⁸。さらに連邦憲法制定会議代議員（1787年）も務めた。こうしてフランクリンは、「アメリカ建国の父祖」の一人としても知られている。

3 フランクリンは大学教員でも法曹でも聖職者でもない。彼は印刷屋・新聞屋であって、地域の人々を相手に新聞やパンフレットを売り（ルメイが指摘するように、科学的業績を除き、フランクリンの著作が当時のイギリス知識人に知られることはなかった⁹）、地域の人々に呼びかけて社会・政治活動を組織した。その著作は膨大だが¹⁰、ほとんどは時事評論的なパンフレット、社会・政治活動の文書、手紙などであって、道徳、歴史、政治に関する本格的な理論はほぼ皆無、体系的著作はない¹¹。フランクリンは市井の知識人であり社会・政治活動家であって、具体的活動のなかで自らの思想を示していく、いわば実践知の思想家なのである。ゆえに

⁸ 独立宣言、米仏同盟条約、パリ条約、合衆国憲法の四つに署名しているのはフランクリンただ一人である。

⁹ Lemay, *The Life of Benjamin Franklin vol. 2*, p. 38.

¹⁰ 40巻以上の膨大な著作集がYale University Pressから刊行中である。未刊行の部分も含めて、ウェブサイト上でdigital editionが無料公開されている。

Leonard W. Labaree et al. eds., *The Papers of Benjamin Franklin* (New Haven: Yale University Press, 1969-). 以下PBFと略記し、たとえば3巻はPBF3とする。デジタル版は

<http://www.yale.edu/franklinpapers/digitaledition.html>, <http://www.franklinpapers.org/> なお以下フランクリンのテキストについては著者名を省略する。

¹¹ Cambridge Texts in the History of Political Thought シリーズのフランクリンの巻 Alan Houston ed., *Franklin: The Autobiography and other Writings on Politics, Economics, and Virtue* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004) では、『自伝』が半分以上を占め、あとは短いテキストや手紙が集められている。

その思想は、具体的活動の文脈のなかでこそ明確に把握できる。これが、フランクリンのテキストを、彼の社会・政治活動のなかで読むという方針を採用する理由である。

二 誰もがもつ判断能力としての「常識」

1 「常識」とは極めて多義的な語である。ここでは、一つの手がかりとして、フランクリンの1759・71年の二度のスコットランド旅行で親しく触れ合い、手紙のやりとりを続けた¹²スコットランド啓蒙の大物の一人・ケイムズ卿(ヘンリ・ヒューム)の思想における「常識」概念を参照しよう。ケイムズ卿は、のちにトマス・リードによってまとめられるいわゆる「スコットランド常識哲学」に強い影響を与えた人物であり、常識哲学の始祖と言われることもある。1751年に出版された『道徳と自然宗教の原理¹³』に彼がそう呼ばれる根拠が示されている。それは、篠原久の明晰な整理を参照すると¹⁴、①抽象的な「哲学的議論」ではなく、自然が人類に与えた「日常生活上の事実」をこそ信頼するという基本姿勢、②人は理性によるのではなく

道徳感覚が触発されて生じる「感じ feeling」によって道徳的判断を下すという主張、③超越的神の全能性ゆえに人間行動は必然に支配されているのであるが、「生活の有用な目的のために」自然が人類に欺瞞としての「自由な感じ」を与えたという、有用性を重視する信仰理解¹⁵、などである。総じて言えば、「自然の構造に組み込まれたわれわれの諸感覚へ全面的な信頼を寄せる道徳論・認識論(および宗教論)¹⁶」がケイムズ卿の「常識哲学」の中核である。

このケイムズ卿の「常識哲学」の行論、とくに上記の①②を参考にすれば、「常識」という多義的で理解が難しい語を次のように定義することができるだろう。すなわち、理性に基づくとされる抽象的議論ではなく、自分にはそう感じられる・当然に思われるという端的な事実に基礎をおく、人が多面的な日常生活を送る上で有用な性質をもつ、判断の能力であると。この意味での「常識」は、訓練を受けた知識人や専門家ではなく、普通の人々すべてに備わっていると考えられる。また、そう感じられるという事実に依拠することからして、好悪の感情を伴いがちであることにも注意すべきだろう¹⁷。

2 フランクリンにはケイムズ卿のような詳細な認識論はないし、そもそも人間能力としての「常識」のありかたを吟味しようという哲学的姿勢がない。フランクリンにはもっぱら人間関係・社会関係をどうつくっていくかという実践的課題に関心を向ける人である。しかし明示的ではないものの、フランクリンのさまざまな言動には、ケイムズ卿の「常識哲学」と接近する認識が示されている。

まず、「感じ feeling」という語こそ用いない

¹² 両者の理論的影響関係をまったく否定する見解もある。Andreas Rahmatian, "The Influence of Lord Kames (Henry Home) on some of the Founders of the United States," in *Historia et ius*, Num. 7 giugno 2015.

¹³ Henry Home, Lord Kames, *Essays on the Principles of Morality and Natural Religion* (Indianapolis: Liberty Fund, 2005), <http://oll.libertyfund.org/titles/kames-essays-on-the-principles-of-morality-and-natural-religion>. 田中秀夫・増田みどり訳『道徳と自然宗教の原理』、京都大学出版会、2016年。ただしこれらは第三版を定本としている。

¹⁴ 篠原久「ケイムズ卿における常識哲学の形成」『アダム・スミスと常識哲学』有斐閣、1986年。また feeling をもつ「生身の普通の人々」がケイムズ卿の思想に占める位置について、有江大介「アダム・スミス：穏健派とケイムズとシヴィック・ヒューマニズム」、『経済学史学会年報』33巻33号所収、1995年。

¹⁵ しかしスコットランド教会の福音派から批判され、ケイムズ卿は版を改め必然性の主張を弱めたとされる。

¹⁶ 篠原、前掲書、194頁。

¹⁷ 参照、納富信留「共通感覚」、永井均ほか編『事典 哲学の木』講談社、2002年。

が、人を実際に動かすのは情念・感情であるという行為論がある。フランクリンはこの認識を常に前提して人々に関わろうとする。例えば、「謙遜で遠慮がちな言葉で自分の考えを述べる」ことが有効だとフランクリンは悪びれずに言う。「多分そうでしょう」「私が間違っていないければそうでしょう」などの謙虚ぶった表現を使うことが「自分が計画を立ててそれを推し進めていくにあたり、自分の考えを十分に人に飲み込ませてその賛成を得る必要があった場合に少なからず役に立った¹⁸」。例えば、嫉妬という手なずけがたい感情への配慮も重要だと言う。図書館組合設立時の経験を例に挙げ、「ある計画をなしとげるのに周囲の人々の助力を必要とする場合…〔自分が〕有名になりそうだという計画であつたら、…自分がその発起人だという風に話を持ち出しては、事はうまく運ばない」のであり、自分を表に出さずに進めることが成功の秘訣だと語る¹⁹。

3 続いて、情念・感情に左右される人間が道徳的に行為するためには理性だけでは足りず、コツ、技法 art が必要だという道徳論がある。『自伝』で最も有名な箇所であろうが、「道徳的完成に到達しようという不敵な、しかも困難な計画」としての「十三徳」の習得にあたり、フランクリンは最初は「何が善で何が悪であるかは分かっている、あるいは分かっていると思うから、常に善をなし、悪を避けることができないわけはあるまい、と考えた」。しかし実際にやってみると、そう簡単に事は進まないのである。そこでフランクリンは次のように考えを改めた。「単に理論上の信念だけでは過失を防ぐことはとうていできない。…まずそれに反する習慣を打破し、良い習慣をつくってこれをし

っかり身につけねばならない²⁰。」そこで身につけたい十三の徳の表を手帳に書き込み、毎日就寝前に今日一日の自分の行動が有徳といえるかどうかをチェックしたり、週毎に項目を選んで重点的に習慣づけようと試みたりするのである。

このような経験を踏まえ、『徳の技法 Art of Virtue』というパンフレットを執筆することをフランクリンは予定しており（実現しなかった）、1760年5月のケイムズ卿への手紙でこれに触れている²¹。そこでフランクリンは、道徳的徳を身につけ「善良、公正、穏健に」なるために考慮されるべきことは、「性来持っているものに加えて、欠けているものを得、得たものを確保するということは、『技術』の問題」であること、絵画・航海・建築などと同様に「仕事の方法、つまりすべての道具の正しい使い方を教えなくては」いけないことである、と指摘する。自分が書くこのパンフレットは「皆の役に立つ universal Use」だろうと自負している。

とくに老年のフランクリンには、より直裁な、理性に対するシニカルな評価も散見される。『自伝』のなかで、魚を食べないという自分の主義を破ってしまったとき、また道徳的完成を目指そうという取り組みに疲れ諦めそうになるときに、「理性のある動物、人間とはまことに都合のいいものである。したいと思うことなら、何にだって理由を見つけることも、理窟をつけることもできるのだから」という自己嘲笑的なアイロニーが現れる²²。

²⁰ “The Autobiography,” p. 1384. 松本・西川訳、136頁。

²¹ To Lord Kames, May 3 1760. *PBF9*, p. 103. 池田訳、68–70頁。訳文を一部変更した。この手紙でフランクリンはケイムズ卿の『平衡法の原理 The Principles of Equity』を拝受し楽しく読んでいること、自分の書いた「大英帝国の権益について論ず The Interest of Great Britain Considered」「迫害に反対する寓話 A Parable against Persecution」を卿の希望に応じて送ることを嬉しそうに述べている。

²² “The Autobiography,” p. 1339, 1390. 松本・西川訳、

¹⁸ “The Autobiography,” p. 1322. 松本・西川訳、29頁。

¹⁹ “The Autobiography,” p. 1380-1. 松本・西川訳、131頁。

以上のようなフランクリンの言動には、抽象的議論や理性よりも、人々を実際に突き動かすであろう情念や感情を重視し、それを上手にコントロールして自己や人々を望ましい方向へと動かしていこうという志向が強く表れている。

4 さらに興味深いのは信仰論である。若きフランクリンは、両親とは異なり、ピューリタニズムを批判する理神論に強い理論的説得力を感じていた。「無限の知恵、仁慈、力などの神の属性から考えて、この世には悪というものはありえない、美德 *Virtue* とか悪徳 *Vice* とかいうのは空しい区別で、そんなものは存在しないのだ²³」などと主張する極端に理神論的なパンフレット『自由と必然、快楽と苦痛についての論』²⁴を 1725 年という時期に(ロンドンで印刷の修行中に)執筆・発行したほどである。このパンフレットはロンドンの理神論者・自由思想家たちとフランクリンとの交流を生み出した(マンデヴィルと知り合ったのもこの縁である²⁵)が、皮肉にも彼らとの交際をきっかけとして、フランクリンは理神論の正しさを疑いはじめる。この教義を奉ずる友人たちから悪辣な振舞いの数々を受けたことを思い、自身の友人に対する振舞いをも反省して、

「この教義〔理神論〕は、真実であるかもしれないが、あまり有用ではないのではあるまいか *it might be true, was not very useful* と私は思い始めた。…私は人と人との交渉が真実と誠実と廉直をもってなされること *Truth, Sincerity and Integrity in Dealings between Man and Man* が、人間生活の幸福にとってもっとも大切だと信じるようになった。」

「ある種の行為は天啓によって禁じられてい

58, 146-7 頁。

²³ “The Autobiography,” p. 1359. 松本・西川訳、94 頁。

²⁴ “A Dissertation on Liberty and Necessity, Pleasure and Pain,” 1725, in *PBF1*, p. 64. 池田訳、80 頁。

²⁵ “The Autobiography,” p. 1346. 松本・西川訳、71 頁。

るから悪い *bad* のではなく、あるいは命じているから善い *good* というのでもなく、そうではなくて、それらの行為は、あらゆる事情を考え、本来われわれにとって有害 *bad* であるから禁じられ、あるいは有益 *beneficial* であるから命じられているのであろうと私は考えた²⁶。」

フランクリンの理神論は、(25 年ほどのちに執筆されることになる) ケイムズ卿の「自由と必然」論によく似ているが、卿が理神論的判断を保持しつつ、生活上の有用性を重くみた折衷案を提出したのに対し、若きフランクリンはあっさり「理神論は有用ではない」としてこの信仰を放棄する。代わりにフランクリンの新たな信仰となるのは、興味深いことに、両親が敬虔に信仰するピューリタニズムへの帰還ではなく、どこまでも有用性にこだわること、つまり他者に対して有用であること、他者に善行をなすこと *Doing Good to Man*、という理念なのである²⁷。これがフランクリンの「常識」思想の次の側面につながっていく。

三 善行プロジェクトの土台としての「常識」

1 理神論を放棄した直後に、若きフランクリンが書いた自らの「信仰箇条」はこうである。

²⁶ “The Autobiography,” p. 1359. 松本・西川訳、94 頁。

²⁷ ウェーバーの「資本主義の精神」テーゼ以来、フランクリンの信仰は論争的テーマであり続けており、いまなお様々な解釈が衝突している。近年の検討として、総括的整理を含みつつ興味深い解釈を提示している Kerry Walters, “Franklin and the question of religion,” in Carla Mulford ed., *The Cambridge Companion to Benjamin Franklin* (Cambridge: Cambridge University Press, 2008), ウェーバーの解釈を批判しフランクリンの信仰を「産業的啓蒙」運動のなかに位置づける山本通「ベンジャミン・フランクリンと産業的啓蒙—幸福のための改善—」『商経論叢(神奈川大学経済学会)』、49 巻 2・3 合併号、2014 年、また梅津順一「フランクリンの理神論再考」『青山総合文化政策学』5 巻 2 号、2013 年などを参照。

「宇宙には父なる神がおられる。／無限に良き、力強き、賢きものである。／神は他者を愛し、他者に善をなすような *do good to others* 創造物を愛される。そしてこの世においても来世においても、愛と善行に報いられる。／徳ある人々はこの世において協力し、徳の有益性を強めるべきであり、自らの徳をも高めるべきである。／人はその徳において完成される。」²⁸（一部省略）

フランクリンはここから晩年に至るまで、手紙でも出版物でも、この信条を繰り返す。

「神の摂理を信じることで…私たちは博愛を身につける、つまり他者 *others* に対して役立つ、有益 *useful* であるようになる。」²⁹

「意見はその影響や効果によって判断されるべきです…最後の審判の日には、私たちは考え *thought* ではなく、したこと *did* によって裁かれるのであり、『主よ！主よ！』と言ったからではなく、同朋 *our Fellow Creatures* に善をなしたことが嘉されるのです³⁰。」

「私の信仰箇条はこうです。全世界をつくられた唯一の神を信じる。神は摂理 *Providence* をもって統治する。神は崇められるべきである。我々がなしうる、神に最も嘉される礼拝／奉仕 *service* は、神の子たちに善をなすことである。That the most acceptable Service we can render to him, is doing Good to his other Children. 人間の魂は不滅であり、行いに応じて、来世で正しい待遇を受ける。これはすべてのしっかりした宗教の原理だと私は考えています³¹。」

²⁸ “Doctrine to be Preached,” 1731, in *PBF1*, pp. 212-213.

²⁹ “On the Province of God in the Government of the World,” 1730, in *PBF1*, pp. 264-269. 引用は p. 269.

³⁰ To Josiah and Abiah Franklin, April 13, 1738. *PBF2*, p. 203. 池田訳、95～96頁。

³¹ To Ezra Stiles, Tue, Mar 9, 1792.

<http://franklinpapers.org/franklin/framedVolumes.jsp?vol=46&page=400>. unpublished.

碩学モーガンが的確にまとめたように、フランクリンにとっては、同朋の人々に対する奉仕こそが神への奉仕を意味するのであり、これが彼の人生を貫いていたのである³²。フランクリンの信仰は、他者に対して善をなすこと、そして善をなせる有用な、その意味で有徳な人間であることにあった。これに基づいてフランクリンは日々神に祈り自分をチェックする。ここには神の有用な道具としての自己意識があり、それゆえ強い活動性が生じる。それに伴い、フランクリンにとって個々の宗教（宗派）の違いはほとんど意味をなさず、「他者への善行」をなしうる市民を育てうるような宗教であるかどうかだけが問題とされることになる³³。

2 しかし、「他者への善行」とは具体的に何をすることなのか。フランクリンの「徳」という語の用法がそれを示唆してくれる。

フランクリンはパンフレットや暦（当時聖書に次いで読まれた）で、また「人々に向けて書いた」と自ら注記した『自伝』で³⁴、しつこいほどに「有徳たれ」と訴える。彼が掲げる徳の多くは——あの十三の徳³⁵、「節制」「沈黙」「規律」「決断」「儉約」「誠実」「正義」「中庸」「清潔」「平静」「純潔」「謙讓」を含めて——自己を

³² Edmund S. Morgan, *Benjamin Franklin* (New Haven: Yale University Press, 2002), p. 314.

³³ 「道徳や徳が目的であり、信仰 *Faith* はその目的を獲得するための手段に過ぎない。」“Dialogue Between Two Presbyterians,” in *PBF2*, p. 30. またフランクリンはある長老派牧師の説教を聞き、「私たちが善い市民 *good Citizens* にするよりも、長老派にすることを目的にしているようだ」と皮肉っている。“The Autobiography,” pp. 1382. 松本・西川訳、134頁。

³⁴ 『自伝』前半（第1回の執筆部分）は息子ウィリアムに宛てて書かれており、後半（第2回以後の執筆部分）は知人からの要請に応じて「公衆 *the Publick* に向けて書かれた」とフランクリン自身が注記している。“The Autobiography,” p. 1372. 松本・西川訳、116頁。なお P. M. Zall, *Franklin's Autobiography: A Model Life* (Boston: Twayne Publishers, 1989)は『自伝』が書かれた背景、表現技法などを簡潔に整理しており、有用である。

³⁵ “Autobiography,” pp. 1383-1384. 松本・西川訳、136頁。

規律しながら職業に打ち込む能力であり、経済的成功を願う人々にとって有益な教えであった³⁶。フランクリンが52歳のとき発行したパンフレット「富にいたる道³⁷」は徳の説明集であり、たとえば「勤勉」を説くために「神は自ら助ける者を助ける」、「墓場に入れば十分眠れる」、「消えた時間は絶対に見つからず」、「今日の一日は明日の二日に値する」などの標語が次々に繰り出される。たとえば「儉約」を説くためには「塵も積もれば山となる」「美食家の末は乞食」「道楽一つの金で、子供二人が育つ」などの標語が並ぶ。そして「私が若くして窮乏を免れ、財産をつくり、さまざまな知識を得て有用な市民となり人々に名を知られたのは、勤勉と儉約の徳のおかげ」³⁸だから、真似て欲しいと言う。つまり経済的成功は、有用な市民になるための必要条件なのである。

さらに、次のような認識にも注目したい。

「[アメリカには]大土地所有者は少なく、小作人も少ない。大半の人々は、自分自身の土地を耕すか、何か工業や商業に従事している。／アメリカでは、他人について『あの人はどういう身分の人?』とは尋ねずに、『あの人は何ができる人?』と尋ねる。／農民、機械工でさえも尊敬されている。その職業が有益だからだ。...自らの祖先が有産階級の紳士ではなくて、農夫、鍛冶屋、大工、ろくろ師、織工、皮なめし工、靴直し、要するに社会の有益な構成員

³⁶ クラムニックは「徳」の意味変化に着目し、バー、プライス、プリーストリーらにとって「徳とは経済的成功を支え、能力ある市民を支える精神であり、逆に怠惰、浪費、生産性の低さは悪徳・腐敗のことを意味していた」と整理している。フランクリンとの共通性を感じさせる。Isaac Kramnick, *Republicanism & Bourgeois Radicalism: Political Ideology in Late Eighteenth-Century England and America* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1990), pp. 194ff, pp.214ff, pp. 254ff.

³⁷ “The Way to Wealth,” in *PBF* 7, pp. 326ff. 松本・西川訳、273～291頁。池田訳、56～67頁。

³⁸ “The Autobiography,” p. 1391. 松本・西川訳、148頁。

useful Members of Society だったと分かったほうが...人は系譜学者に感謝するだろう。...有産階級の紳士は...地代などの所得で何もしないで生きていける金持ちであり...何も価値あることをせず、無為に他人の労働に寄食する、単なる穀潰し、あるいはろくでなしなのだ。...勤勉さ、そしていつも常に仕事に従事していること。これこそが一つの国民のモラルと徳との防腐剤なのである。」

1784年、79歳で執筆した「アメリカに移住しようとする人びとへの情報³⁹」の印象的な一節である⁴⁰。このように、職業労働は各自が富にいたる道であると共に、社会に対する有用な貢献として、「他者への善行」なのである。さらにフランクリンは「社会」を有用な職業のネットワーク、職業による相互の役立ち合いであるとみなしている。職業労働への従事は、職業のネットワークに入って社会に貢献することである⁴¹。

3 「他者への善行」の内容はまだある。日々働き自立している人々は、成功するため自己規律するとともに、顧客や商売仲間との相互注視

³⁹ “Information to Those who would remove to America,” in *WBF* 8, pp. 603-614. 池田訳、121～129頁。

⁴⁰ 同時にこのパンフレットは、フランクリンが新興国アメリカをどう見ていたか、または世界に向けてどうプレゼンテーションしようとしていたかをもよく示す。

⁴¹ フランクリンのこのような職業労働観、職業のネットワークとしての社会観は、アダム・スミスの周知の「商業社会」との類似性を感じさせる。つまり、誰もが「ある程度商人となる」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, vol. 1 (Indianapolis: Liberty Fund, 1982), ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner, p. 37. 邦訳『国富論』1、水田洋監訳、杉山忠平訳、岩波文庫、2000年、51頁)社会であり、「中流および下流の、生活上の地位においては、徳への道と財産への道は・・・幸福なことに、たいいていの場合ほとんど同一である」(Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments* (Indianapolis: Liberty Fund, 1982), ed. by D. D. Raphael and A. L. Macfie, p. 63. 邦訳『道徳感情論』(上)、水田洋訳、岩波文庫、2003年、166頁)ような社会である。

に晒されるなかで、約束を守り互いに協力する人間になるよう訓練を受けることになる（ゆえにフランクリンは勤勉であるように「見える」ことも重要だと主張する⁴²）。それが仲間と共に活動する能力を培う⁴³。このような条件の下で営まれる、人々の参加による公共的課題の解決（社会の改良）が、フランクリンの考えるもう一つの「他者への善行」なのである⁴⁴。

再び『自伝』を開いてみれば、フランクリンが仲間たちと自発的結社をつぎつぎに組み、公共的課題を解決していく様子が生き生きと、淡々としたなかにも自負を覗かせながら、記されている⁴⁵。フランクリンが主導的に関わったプロジェクトの主なものを列挙してみよう。①ジャントーJunto（1727年）。「相互の向上を図る」ための、若手職人らの議論クラブ。②会

員制図書館（1731年）。当時貴重品だった本を共有するためのサークル。③夜警組合・消防組合（1736年）。防火対策を行うサークル。④アメリカ学術協会（1743年）。自然科学などの研究・情報共有のためのサークル。⑤民兵組織（1747年）。後述する。⑥大学（アカデミー）設立活動（1749年⁴⁶）。のちのペンシルヴェニア大学である。⑦病院設立活動（1751年）。⑧奴隷貿易廃止協会（1788年）。このような活動の連続をみれば、フランクリンは、植民地社会の改革者と呼ばれるのが相応しい。そしてこのような活動に人々を上手に巻き込み、活動を成功させるために、前節で触れた、人間社会の「常識」への繊細な洞察が縦横に活用されているのである。

4 学者のような専門的知識を持たないかもしれないが、「自分にはそう感じられる」という事実にしっかりと足をつけて健全な判断を下す能力（「常識」）を持っている普通の人々。彼らは日々自らの仕事に従事し、また仲間たちと自発的結社を形成して社会の課題に取り組み、「他者への善行⁴⁷」を実践している。フランクリンが理想としたのはこのような社会であった。そしてフランクリンはこのような社会が現実に生成しつつあるという楽観的な見方に基本的には立ちつつ、「他者への善行」をさらに深化・拡張すべく、上で述べたようなかたち（①職業労働の意味づけ・推奨、②公共的活動への参加の促し）で、具体的な介入を種々試みたのだった。これをフランクリンの「他者への善行」プロジェクトと呼んでいいだろう。

⁴² 「商人としての信用を保ち、評判を失わぬようにするため、私は実際によく働き儉約を守ったばかりでなく、かりにもその反対に見えるようなことは務めて避けた。着るものは質素なものに限り、遊び場所には絶対に顔を出さなかった。・・・方々の店で買った紙を手押し車に積んで、自分で往來を引いて帰ることも度々あった。」“Autobiography,” p. 1369. 松本・西川訳、109頁。当時の人々は相手が真面目に働くか、契約をきちんと守るか、人柄に問題はないか、などを注視し合っており、商売上の信用を失うことは致命傷にもなりえた。武則忠見『民衆とアメリカ革命』亜紀書房、1976年、27頁以下で例示されている、自分の評判を守るための新聞広告の数々は非常に興味を引くもので、ユーモラスな味わいすらある。

⁴³ Newman, op. cit., p. 93. Billy G. Smith, “Benjamin Franklin, civic improver,” in Page Talbott ed., *Benjamin Franklin: In Search of a Better World* (New Haven: Yale University Press, 2005), p.100.

⁴⁴ Morgan の前掲した伝記はこの組織的な公共的活動への従事をフランクリン思想の中核とみなしている。また Alan Houston, *Benjamin Franklin and the Politics of Improvement* は、経済活動、政治活動、人口論、奴隷制論などのフランクリンの諸活動を貫くものが「改良」という理念だとする。

⁴⁵ John C. Van Horne, “Collective Benevolence and the Common Good in Franklin’s Philanthropy,” in Leo Lemay ed., *Reappraising Benjamin Franklin: A Bicentennial Perspective*. Newark (Newark: University of Delaware Press, 1993), 梅津順一「社会起業家フランクリン」『青山総合文化政策学』（青山学院大学総合文化政策学部）3巻1号、2011年。

⁴⁶ 拙稿「有用さの教育——ベンジャミン・フランクリンのアカデミー設立提案」『東北工業大学紀要 人文社会科学編』26号、2006年、で簡単に検討した。

⁴⁷ なお発明もフランクリンにとっては「他者への善行」の一つである。1741年ごろオープン・ストーヴを発明したとき、フランクリンは専売特許権を断った。それは「自分が何か発明したとき、発明品がひとの役に立つ serving others ことを喜ぶべき」と考えたからだという。“Autobiography,” p. 1418. 松本・西川訳、188頁。

これを成功させるために欠かせないことは、普通の人々の「常識」をよく理解して働きかけること、ときには新たな「常識」をつくりだすことである。そう考えると、フランクリンにとって「常識」とは、「他者への善行」に満ちたアメリカ社会⁴⁸をつくるための土台となるものであった⁴⁹。

田中秀夫はスコットランド啓蒙を貫く問題意識を「文明社会と公共精神」の両立であると見定める⁵⁰。一方で、イングランドとの「合邦を

⁴⁸ 独立戦争前のおよそ10年間を外交官としてロンドンで過ごしたフランクリンは、友人への手紙などで、この観点からのアメリカとイギリスの比較をしばしば行う。その図式は単純で、有徳(①勤勉、儉約など+②公共的参加)なアメリカ植民地を褒め、対して①貧富の格差がいちじるしく(とくにアイルランド、スコットランド)、②一般人の政治参加があまりないイギリス本国を嘆く。フランクリンの「忠誠心の革命」の背景となった認識の一つはここにあると思われる。一つの例として、To Joseph Priestly, 7 July 1775. in *PBF22*, pp. 91-93. 池田訳、202~204頁。

⁴⁹ このようにフランクリンの思想構造をまとめると、フランクリンの信仰とウェーバー・テーゼとの新たなかかわりが見えてくる。ここで詳しくは述べられないが、①「他者への善行」という理念はボストンのピューリタン牧師 Cotton Mather の著作『善行論 Bonifacius: An Essay to do Good』(1710)からの影響であることをフランクリン自身が認めていること(もう一人挙げられているのはデフォーである)。②抽象的な「社会全体」への奉仕義務、その方法としての禁欲的自己規律という組み合わせがウェーバーの禁欲的プロテスタンティズム・モデルとそのフォームを同じくしていること、は見落とせない。神観念の点ではフランクリンはまったくピューリタンではないが、思想のフォームをつかまえることも重要ではないだろうか。拙稿「「世俗化したピューリタン」論再考——ベンジャミン・フランクリンの宗教思想について——」、『ピューリタニズム研究』第2号、2007年を参照されたい。

とはいえ、フランクリンの Doing Good 思想をすべてピューリタニズムの世俗化とみることもまた一面的であろう。今回は触れられないが、ケイムズ卿だけでなく、シャフツベリ伯、ハチソンらの思想的構えや徳の用語法はフランクリンに近い面がある。ピューリタニズムの遺産に加え、これらの影響関係のネットワークのなかで、フランクリンは自己形成していったのであろう。

⁵⁰ 田中、前掲書のほかに、同『スコットランド啓蒙思想史研究 文明社会と国制』名古屋大学出版会、1991年、『文明社会と公共精神 スコットランド啓蒙の地

基盤として、法曹と教会と大学を拠点に、イングランドの自由と富と文明を積極的に受容し、社会的で幸福な社会と文化の形成を目指すことと、他方で、スコットランドのアイデンティティを、公共社会への自発的貢献という意味での「有徳さ」(公共精神)のかたちで確認することと、この両方を追求することである⁵¹。その上で田中はフランクリンがこの思想圏にいたと指摘している。本稿のようにフランクリンの「常識」思想を整理してくると、この指摘は大変示唆的であり、意義深いといえるだろう。

しかし、フランクリンの「常識」思想の射程はまだ尽きてはいない。

四 革命的な政治原理としての「常識」

1 フランクリンの公共的活動のなかで、フランクリンが「常識」の語をキーワードとして用い、彼がこの語に込めた意味内容をはっきり示したケースがある。1747年、フランクリン41歳のときに試みた民兵活動と、それに際して書かれたパンフレット「明白な事実 Plain Truth」がそれである。この活動は、上で触れた彼の社会改良の一環であるとともに、それを一歩踏み出し、政治権力と際どく接触している。さらに、ある意味で革命的な政治原理を提出しているとさえ解釈できる⁵²。

層』昭和堂、1996年などを参照。

⁵¹ 田中はケイムズ卿を「富と徳との両立」を推進した代表者の一人としている。『文明社会と公共精神』、44頁。

⁵² Sally F. Griffith, "“Order, Discipline, and a few Cannon”: Benjamin Franklin, the Association, and the Rhetoric and practice of Boosterism,” *Pennsylvania Magazine of History and Biography*, Vol. CXVI, No. 2 (1992). Douglas Anderson, *Radical Enlightenment of Benjamin Franklin* (Baltimore & London: The Johns Hopkins University Press, 1997), pp. 189ff. 筆者も「ベンジャミン・フランクリンの軍事アソシエーション」『法学』(東北大学)72巻、2009年で検討を行った。

2 フランクリンの民兵活動の特殊性を理解するには、まず、その背景を理解する必要がある。できるだけ簡潔に述べてみよう。

直接のきっかけは、オーストリア継承戦争が北米植民地にも波及し、イギリスとフランス・スペインとの間での軍事衝突（いわゆるジョージ王戦争）が起きたことである。とくに 1747 年 7 月、フランス・スペインの私掠船がペンシルヴェイニア植民地に出没し農場を襲ったことは人々に衝撃を与えた。何らかの対処の必要性を人々は痛感した。

しかしペンシルヴェイニア植民地には軍事組織が存在しなかった。ペンシルヴェイニアはもともとイギリス王から領主ウィリアム・ペンに個人的に付与された（1681 年）いわゆる領主植民地 *proprietary colony* であり、クェーカー教徒だったペンが徹底的平和主義を国是としたため、ほかの植民地とは異なり、軍事組織を持たなかったのである⁵³。

二代目の実質的領主トマス・ペン（ウィリアムの次男）やその意図をくむ総督たちは実は軍事組織の設立を望んでいたのだが、クェーカー・エリートが大勢を占めていた植民地議会が強く抵抗し、ずっと手詰まり状態に陥っていた。上記の農場襲撃事件が起きて、領主・総督の側も、議会の側も、対立を続けるだけであった。

3 この手詰まり状況においてフランクリンは何をしたか。彼は「人々の自発的なアソシエーションによってやれるところまでやってみよう

と決意」⁵⁴した。まず自身の新聞『ペンシルヴェイニア・ガゼット』に防衛の正当性を訴える小論を掲載し、また何人かの総督周辺の要人と相談したのち、11 月 17 日、住民自身が軍事アソシエーションを組織する必要性を訴えるパンフレット「明白な事実⁵⁵」を「フィラデルフィアの手工業者」名義で執筆し、二千部印刷して無料で配布した。第二版も発行され、ドイツ語にも翻訳され、ニューヨークなど他の植民地でも抜粋が読まれたこのパンフレットは「たちまち驚くほどの反響を呼び起こした」⁵⁶。発行の二日後には手工業者中心に 150 人ほどの集会が⁵⁷、その二日後には商人、大土地所有者などの富裕層を集めた集会が開かれた。アソシエーションへの参加希望者は増え続け、最終的には 1 万人を超えた（当時の植民地人口は 15 万人ほど）。人々は中隊・連隊を自発的に編成し、軍事教練を受けるため武装自弁で毎週集まった。このアソシエーションは幸いにも実戦を経験せずに、危機が去るとともに静かに解散した。しかしその記憶は人々に生き続けることになる。

フランクリンは「アソシエーションの形態」⁵⁸なるパンフレットを続けて執筆し、民兵組織の編成や規約を提案し採用された（役職の任期を短く限定する点、軍事評議会に処罰権や課税権を一切与えない点、隊員が上官である指揮官を選択する点などはとくに注目に値する）。中隊ごとに異なる図案と標語を創案した。銃器の取り扱いマニュアルやマスケット銃を販売し、費用を賄うための富くじを販売し⁵⁹、集めた費用

⁵³ 労働力が絶対的に不足している北米植民地では、常備軍を創設する余裕はなかった。ほとんどの植民地では、総督が中心となり、一定年齢の男性住民に対して武装自弁で軍役につく義務を課し、「通常人としての市民が有事に例外的に兵士になる」軍事組織、つまり民兵 *militia* を組織した。そして多くの植民地では総督が職業軍人などから将校を任命し、民兵組織全体を総督の統制下においた。斎藤眞「民兵制度と独立革命戦争 アメリカ軍事制度の原型」『アメリカ革命史研究 自由と統合』東京大学出版会、1992 年、313～368 頁。

⁵⁴ “The Autobiography,” p. 1411. 松本・西川訳、177 頁。

⁵⁵ “Plain Truth: or, Serious Considerations On the Present States of the City of Philadelphia, and Province of Pennsylvania,” in *PBF3*, pp. 180-204.

⁵⁶ “The Autobiography,” p. 1411. 松本・西川訳、177 頁。

⁵⁷ Griffith, *op. cit.*, p. 136.

⁵⁸ “Form of Association,” in *PBF3*, pp. 205-212.

⁵⁹ “Scheme of the First Philadelphia Lottery,” in *PBF3*, pp. 220-224.

でその他の武器を揃えた。商人たちから提供された 1500 ポンドでボストンに大砲を注文し、領主にも大砲購入の援助を求めた（ロンドンで暮らしていた領主はこれを断った）⁶⁰。ニューヨーク植民地へ赴き大砲 14 基を借りてきた。このようなフランクリンの活躍ぶりをみて、領主代理人のジェイムズ・ローガンは領主に宛てて「フランクリンこそがアソシエーションの第一の機動力 the principal Mover であり、全体のまさに生命 very Soul of the Whole である」と書いている⁶¹。

こうして、領主も総督も議会もつくれなかった軍事力を、フランクリンを中心として人々が自発的連帯によって作りだしたのだった。まさにフランクリンの呼びかけにあるように——「いま、われわれは繋がれていないフィラメントのようなもので、力 Strength がない。しかし連帯 Union はわれわれを恐ろしいほどに強力にするであろう。…そして神もそれを嘉されるだろう。」⁶²

4 まず注意すべきことは、活動に参加しようという姿勢、判断力のことをフランクリンが「常識」と呼び、かつ、それをもつのは「われわれ中産層 we, the middling people」であると宣言していることである。パンフレット「明白な事実」を読んでみよう。

フランクリンは、共通の法や権利、血縁、友情、そして経済的利益などによってこの植民地はひとつの身体をなしている（誰もが全体の一部であり、他人ごとではすまされない）と強調する。そしてペンシルヴェイニア全体のことを自分のこととして考えられる人こそが「真のペンシルヴェイニア人であり同朋 fellow-countrymen、[すなわち]常識 common

Sense もしくは善良さ Goodness を有す者」⁶³なのだと宣言する。そして「われわれ中産層の人々、[すなわち]農民、商店主、手工業者 the Farmers, Shopkeepers and Tradesmen」⁶⁴こそがそれなのだとはっきり名指す。これは非常に興味深い記述である。

まず「常識」の語を明示的に用いることにより、そして何よりも「明白な事実」というタイトルをつけることにより、フランクリンが試みていることは、いま民兵が必要であることは「当たり前、自明のこと」と感じられるはずだという、やや脅迫的ともいえる煽動である。これはのちにペインがより熱狂的にやってのけたことの先駆であるといえよう⁶⁵。

⁶³ *PBF3*, pp. 194-195.

⁶⁴ *PBF3*, pp. 198-199, 201. 同じ表現をフランクリンは二回用いている。

⁶⁵ 自分の主張は「単なる事実やわかりきった議論や常識」(42 頁)にすぎない、ゆえに同意しない者は「常識はずれ」である、とのペインの脅迫的レトリックは、次々に繰り出される明確な断定、敵への強い非難、味方の優位性の強調に支えられて、多くの植民地人を説得した。Thomas Paine, "Common Sense," in Bruce Kuklick ed., *Thomas Paine, Political Writings* (Cambridge: Cambridge University Press, 1989), pp. 1-38. 邦訳『常識他三編』、小松春雄訳、岩波文庫、1976年、11~100頁。なお、ペインにこのタイトルを示唆したのはスコットランドで医学を学び、スコットランド啓蒙の知的雰囲気の中かにいたベンジャミン・ラッシュであること(水田洋『アダム・スミス論集 国際的研究状況のなかで』ミネルヴァ書房、2009年所収、313、418頁)、ペインが勤めた印刷業社の主人ロバート・エイトケンがスコットランド生まれの知識人であったこと(Sophia Rosenfeld, *Common Sense: A Political History* (Cambridge and London: Harvard University Press, 2011), p. 138.) などから、ペインの「常識」の用語法とスコットランド常識学派との関連も指摘されている。しかしまた、ペインをフィラデルフィアに移住させたのがフランクリンであること、そして何よりもペインの著作がもともと「明白な事実 Plain Truth」と題されていたこと(Rosenfeld, *op. cit.*, p. 141.) などからみて、ペインとフランクリンとの関わりも興味深い論点と言わなければならない。ペインとフランクリンの政治思想の比較という課題については、機会を改めるほかはない。しかしローゼンフェルドが指摘するように、ペインがアナキズムに接近する預言者的なパトスに満ちていたとすれば、フランクリンは経験から学び、仲間たちへの信頼を支えとした、プラクティカル/プラグマティカルな改革者であった

⁶⁰ *PBF3*, pp. 184-186.

⁶¹ James Logan to Thomas Penn, November 24, 1749, quoted in *PBF3*, p. 185, n6.

⁶² *PBF3*, p. 202.

さらに「常識」の持ち主は「われわれ中産層」だけだという断言からは、先に述べた、日々の職業労働と公共的活動を担って活動している人々に対するフランクリンの強い信頼が伺える⁶⁶。それにしても、政治エリートを含む富裕層を仲間を含めないのは何故なのか、財力ある彼らこそが頼りになるのではないか。しかしフランクリンはそうは考えない。富裕な人々は家族を連れ財産をもってペンシルヴェイニアから逃亡できるのであり、頼りになりにくい。そもそも危機を招いたのは富裕層（総督側、議会側の両方）の責任であり、いまだにいがみ合っばかりいる彼らを信頼することなどできないのである⁶⁷（とはいえ、実際には参加を呼びかけ、経済的協力も得ているが⁶⁸）。また、経済的に自立できず武装自弁もできそうもない貧困層にはフランクリンは言及しない。フランクリンの認識では、「われわれ中産層の人々、農民、商店主、手工業者」だけが、民兵活動を担いうる「常識」をもつ者なのである。

5 この民兵活動が意味するものを、政治思想の観点から検討してみよう。

と対比することができるかもしれない。

⁶⁶ 経済史家レモンによれば、一八世紀半ばのペンシルヴェイニアでは富裕層 *better*、中産層 *middling*、貧困層 *poor sort* の三つのカテゴリーが当時の人々にも認識されていた（納税調査からも推定できる）。James T. Lemon, *The Best Poor Man's Country: A Geographical Study of Early Southeastern Pennsylvania* (Baltimore and London: The Johns Hopkins Press, 1972), pp. 10-11.

⁶⁷ 議会に集う「キューカー」は宗教的良心（絶対的平和主義）をもっているものの、住民全体の保護という役割を放棄している点で批判に値する。総督やその周辺に集う紳士たちは、人々に訴え人々をまとめていこうという積極性を発揮しない点で批判に値する。*PBF3*, pp. 199-201.

⁶⁸ この点を重視するウッドは、フランクリンは有閑階級の紳士になろうと願っており、民兵活動の頃には「金銭の必要性に迫られていない者だけが公共の事柄に関わるべきであると考えに至っていた」と解釈する。しかし本文のような検討を踏まえると、この余りに偶像破壊的な解釈には疑問が残る。Gordon S. Wood, *op. cit.*, p. 56. 池田・金井・肥後本訳、71頁。

フランクリンは民兵活動を通じて、「常識」をもたない富裕層・エリート層が、社会全体を拘束する政治権力を行使していることの不条理を苦々しく理解したであろう。フランクリンは「議会は住民全体の保護という役割を放棄し、公金を無駄にしているし⁶⁹、領主はロンドンで見ているだけで防衛費すら協力しない」と怒っている。政治権力を行使する者たちは、社会全体のための公共的決定としての政治を放棄しているのだ。

このような状況を鑑みてフランクリンは、「常識」をもつわれわれが、既存の政治権力とは別に、きちんと機能する政治権力を生み出してもよいはずだと考え、実際に権力を生成してしまった。生成された権力は、総督や議会を含めた植民地全体を拘束しうる強さをもつという意味で、少なくとも潜在的に政治権力の性格をもっていたということができよう。

念のため付言するなら、「民兵はうまくいったので次は大学にとりかかった」などと述べる『自伝』のあっさりとした記述からみて⁷⁰、フランクリンは民兵活動を図書館設立などと同じ社会改良活動の一つとみなしていたようであり、民兵活動において踏み出された一歩、すなわち社会改良から政治活動への一歩は必ずしも明確に意識されてはいなかったように思われる。しかしフランクリンは、意識しないがそう行っ、つまり新たな政治的原理——「常識」をもつ「われわれ」が新しい政治権力を勝手につくりだしていいという——を無造作に提出してしまった。モーガンはこれを「常識に基づく、民主的原理 *the common sense, democratic principle*」と呼んでいる⁷¹。この原理はのちに、アメリカ独立

⁶⁹ *PBF3*, pp. 199-200.

⁷⁰ “Autobiography,” pp. 1410ff. 松本・西川訳、176頁以下。

⁷¹ Morgan, *op. cit.*, p. 67. ただしモーガンは、フランクリンは決して「意識しないで」この原理を提出したのではなく、既存の政府の権威への挑戦と受け止められないように注意深く配慮したのだと言う。確かにフ

革命期の多くの植民地人に受け継がれていくことになるのであり⁷²、フランクリンの民兵活動こそ「革命の序章を正当化するものである」とアンダーソンが述べているのは基本的に妥当であろう⁷³。

踏み出されたこの一步の画期的性格をフランクリンたち以上に理解していたのは、ロンドンで様子を見ていた権力者であった。軍隊を欲しがっていたはずの領主トマス・ペンは、フランクリンのアソシエーションを「軍事的コモンウェルス (a Military Common Wealth)」と呼び、「大逆罪以外の何でもない」⁷⁴と怒った。またペンは「人民は自由というものを好むあまり、

放蕩へと落ち込んでいくもの」だから、「最終的にはアナーキーと混乱に終わる」⁷⁵だろうと冷笑的に言い、「中産層」を中心とする人々が安定した秩序をつくりあげる可能性を認めなかった。以前から税金問題などをめぐってくすぶっていた領主と人々の対立はここに原理的対立にまで高められ、妥協しうる範囲を超えた。この厳しい対立関係がこれから独立革命までのペンシルヴェイニア政治を規定することになるが⁷⁶、それについて詳細に触れる余裕はもはやない。

五 おわりに

1 本稿が論じた内容をまとめておこう。

フランクリンの「常識」とは、第一に、普通の人々がもつ、そう感じられるという事実に基づく判断能力のことであった。第二に、第一の意味を踏まえて、人々を上手に教育し組織して、「他者への善行」すなわち社会改良のための活動を集行的に行うための土台でもあった。第三に、政治の原理、それも「常識をもつわれわれが政治権力をつくってよい」という革命的な原理でもあった。

ゴードン・ウッドは、「政治において、そして社会において、ふつうの人々を称賛することこそが、アメリカ民主政治のエッセンスである」と述べている⁷⁷。アメリカ建国の父祖たち

ランクリンは政府要人とよく相談し賛同・協力を得ているが、『自伝』の記述はそのような秘めた意図を感じさせない。さらに検討したい。

⁷² のちの独立革命期に、正統な政治権力とは別に人々が「コンベンション」「 kongress」などの諸会議を自発的に作りだし、そこで本国への抵抗運動や植民地新憲法の制定を行った。武則忠見『民衆とアメリカ革命』155頁。この方式はさらにアメリカ独立宣言、連邦憲法の制定においても採用された。フランクリンの民兵組織活動はこのような将来の動きを先取りしている。

⁷³ Anderson, *op. cit.*, p. 192.

なお田中はフランクリンの民兵活動がスコットランド啓蒙の民兵論に影響した可能性を指摘している(『アメリカ啓蒙の群像』64頁)。蓋然性は大きい。と同時に、たとえばケイムズ卿の民兵論とフランクリンのそれとの差異も大きいことにも注意が必要だろう。篠原、前掲書第5章によれば、ケイムズ卿の考える民兵とは、地主らが上から隊員を選び、7年の任期付で民兵として鍛えるという強制的徴兵制であり、勤勉さの教育の場としての役割を担うことに重点が置かれている。これはフランクリンの民兵活動とは大いに異なる。少なくともそれが革命の原理を孕むことはありそうもない。なお、スコットランド啓蒙が、作為の論理よりも、個々人の意図を超えて発展する「自然的自由の体系」としての社会を歴史的に説明しようとする性格をもつことについて、古家弘幸「社会、言語、思想—スコットランド啓蒙の諸相」『人文科学研究(キリスト教と文化)』46号所収、国際基督教大学キリスト教と文化研究所、2015年、124頁以下を参照。

⁷⁴ Robert Middlekauff, *Benjamin Franklin and His Enemies* (Berkeley: University of California Press, 1996), pp. 38-39. ペンが「コモンウェルス」という語を批判的に用いたときクロムウェルの政体を想定していたと考えられる。

⁷⁵ Thomas Penn to Richard Peters, June 9, 1748, quoted in *PBF3*, p. 186.

⁷⁶ Gary B. Nash, *Quakers and Politics: Pennsylvania, 1681-1726* (1968; Princeton: Northeastern University Press, 1993); Theodore Thayer, *Pennsylvania Politics and the Growth of Democracy: 1740-1776* (Harrisburg: Pennsylvania Historical and Museum Commission, 1953).

⁷⁷ Wood, "Democracy and the American Revolution," in John Dunn ed., *Democracy: The Unfinished Journey, 598 BC to AD 1993* (Oxford: Oxford University Press, 1993), p. 92.

のなかで、この意味での「民主政治」にもっとも強くコミットした一人がフランクリンであることは、すでに明らかであろう。そしてその土台に、フランクリンの「常識」思想があったことも、認められうるだろう。

2 しかしフランクリンのこの「常識」思想が発揮したであろう効果に関しては、疑問も向けられうるだろう。疑問は少なくとも二つの方向から提起されうる。ひとつは、「常識」をもつ集団から排除された人々についてである。フランクリンが厳しく主張するように、武装自弁できず民兵に参加できない貧困層は政治から排除されているのだろうか。また、フランクリンがかつて偏見を隠そうとせず、のちに「白人の能力と変わらない」として認識を改めた黒人はどうか⁷⁸。いわゆる「インディアン」たちはどうか。そして、暗黙に排除されていた女性たちをどう考えるべきか。

もう一つの疑問は逆の方向から来るだろう。フランクリンは人々を「常識に支えられ、社会活動・政治活動に参加する人々」として捉え、そのような人々を教育し組織しようとしたが、そこには、「常識」という語につきものの、人々の多様な生き方を一色に塗り込めようとする欲求が見えないか。「常識」を利用し、それをつくりだし、人々を一方向へと走らせようとするフランクリンの態度には、人間観のあまりの平板さ・浅さが露呈してはいないか。かつてローレンスがフランクリンを評した以下の、一見とても肯定的で、その実極めて辛辣な言葉に、どう応えるべきだろうか。

「僕は彼〔フランクリン〕を誉めたたえる。何よりもまず彼の不屈の勇気を、つぎに彼の賢

さを、つぎに電気の稲妻を見つめる姿を、そして常識的なユーモアを誉めたたえたい。これらは偉人となる特質のすべてであり、しかも偉大な市民となる以上のものはまったく含まれていない。」⁷⁹

ローレンスの目に映るフランクリンは、確かに「偉大な市民」ではある。しかしそれは無個性でみな同じ顔をした、平板な市民たちの頭目に過ぎないのであった。

「常識」に基づくフランクリンのプロジェクトをどう評価するか。それはこれからも問われ続けるべき課題であるように思われる。

本稿は2016年3月29日(火)、学習院大学にて開催された日本イギリス哲学会第40回研究大会のシンポジウムⅡ(iii)「イギリス思想における常識と啓蒙の系譜～18世紀スコットランドから20世紀ケンブリッジへ」における報告原稿に若干の加筆修正を施したものである。

シンポジウムの主催者・報告者・討論者の方々、またシンポジウムに参加された方々に深く感謝する。

⁷⁸ フランクリンは黒人への偏見を公言していたが、黒人の子供の「自然の能力」を見て評価を改める。To Abiah Franklin, April 13, 1750, *PBF3*, p. 474; “Observations Concerning the Increase of Mankind,” 1751, *PBF4*, pp. 225-234. 池田訳、146～153頁。To John Waring, December 17, 1763, *PBF10*, pp. 395-396.

⁷⁹ D. H. ローレンス『アメリカ古典文学研究』大西直樹訳、講談社文芸文庫、1999年、35頁。